

巾をかぶせ机の下に隠れさせたり、急いで家に帰らせたりもしました。真夏の真つ青な空に、何十機ものアメリカの爆撃機が並んで飛んで行くのを見ました。

一九四五年（昭和二十年）六月十九日の福岡大空襲の時は、福岡の方向の空が、夜なのに、夕焼けよりもまだ濃いオレンジ色になっていたのが、今も記憶に残っています。街全体が燃えていた色だったのでしようね。

人々の生活で、強く印象に残っているのは、ほんとにモノが無かったことです。食料、特に米や塩は大変貴重でした。日々の食事は、小麦粉をこねて水で炊いたお米の代わり、代用食を食べていました。

当時の物不足は、資料館の展示品からもわかってもらえるとと思いますが、兵隊さんの着る防寒服を作るのに、犬や猫を集めて毛皮を取って作ったりもしていました。

また、最初は鉄製だった手榴弾や地雷も鉄が不足し、鉄の代用として陶器製の物が作られたりもしました。

## 「二度と戦争はしちやいかん」

モノだけじゃなく、人手も不足し

ました。私も、男性の先生方が兵隊として戦地に行き、教員不足を補うための代用教員というように、なんでもが代用・代用でした。

そして子どもたちまでもが人手不足を補うために、学校で受けるはずの授業が、遠賀川の河川敷で食料の芋などを作る作業や、勤労奉仕として炭鉱や兵器工場での作業へと替えられていきました。また、女学生などは、戦場の兵隊さんへあてた慰問袋（二頑張ってください。）といった励ましの手紙やお守りなどを入れた袋（を）を作ったりもしていました。

更には、今の中学3年生位（14～15才）からの学生を少年兵として志願・採用し、優秀な下士官を育てる教育も行われていました。実際に、神風特攻隊などでは、飛行機の操縦士の不足からこれらの教育を受けた直後（今の高校生3年生位）に飛び立っていった人もいるそうです。

「二度と戦争はしちやいかん。」と言いつつ、武富登巳男の意志とともに、「誰もが命を、そして平和を大事にせないかん。」という、私自身の思いも込めて、今後この兵士・庶民の戦争資料館で遺品を展示し続けていきたいと思えます。



●（写真右上） 供出（軍に差し出すこと）された猫の受領証。  
（写真右下） 裾の内側部分に4頭分の犬の毛皮を使って作られた兵隊用防寒服。



●（写真左上） 戦争初期に使用されていた鉄製の手榴弾（左）と、戦争末期時に鉄が不足したため陶器で作られた手榴弾（右）。  
●（写真左下） まだまだあどけない少年兵（今の中学3年生くらい）と女学生。